統合失調症患者の薬物療法に関する処方実態調査　その４

～入院患者と外来患者のBMI比較検討～

○桜ヶ丘記念病院　佐藤 康一
精神科臨床薬学(PCP)研究会
鈴木 貴子、髙田 憲一、北川 航平、宇野 準二、天正 雅美、加藤 剛、
梅田 賢太、三輪 高市、野田 幸裕、吉尾 隆

第5回日本精神薬学会総会・学術集会
筆頭発表者のＣＯ Ｉ 開示

演題発表に関連し、開示すべきCO Ｉ 関係にある企業等はありません。

倫理的配慮

本調査や解析では個人情報を慎重に取扱い、
十分に倫理的配慮を行った。

目的

PCP研究会は、国内の統合失調症患者における薬物療法の実態を把握するため2005年以降継続して全国規模での入院患者の処方実態調査を行っている。

▶本報告（その４）では、

- 総合失調症入院患者のBMI(Body Mass Index)
- 統合失調症外来患者のBMI

を令和元年国民健康・栄養調査の結果と比較し問題を明らかにするために調査を行った。

方法

▶ 対象

調査の目的に賛同の得られたPCP研究会会員の所属する施設に、調査日に入院していた統合失調症患者と、外来受診した統合失調症患者。

入院患者調査日：2019年10月31日（87施設）7965名
2020年10月31日（77施設）6812名

外来患者調査日：2019年10月21日～26日（56施設）2455名
2020年10月19日～24日（51施設）2847名

▶ 調査項目

年齢、BMI、抗精神病薬の種類と投与量

本研究対象者のBMIデータと、令和元年国民健康・栄養調査（以下、一般人口）の結果から、“肥満”および“痩せ”の割合を比較した。

BMIの基準には、日本人の食事摂取基準(2020年版)の「目標とするBMIの範囲」を用い、BMIが範囲以上の場合を“肥満”、範囲未満の場合を“痩せ”とした。

年齢	目標とするBMI(kg/㎡)
18～49歳	18.5～24.9
50～64歳	20.0～24.9
65～74歳	21.5～24.9
75歳以上	21.5～24.9

（男女共通）

▶統計解析

χ^2検定にて独立性の検定をおこなった。

一般人口のBMI分布

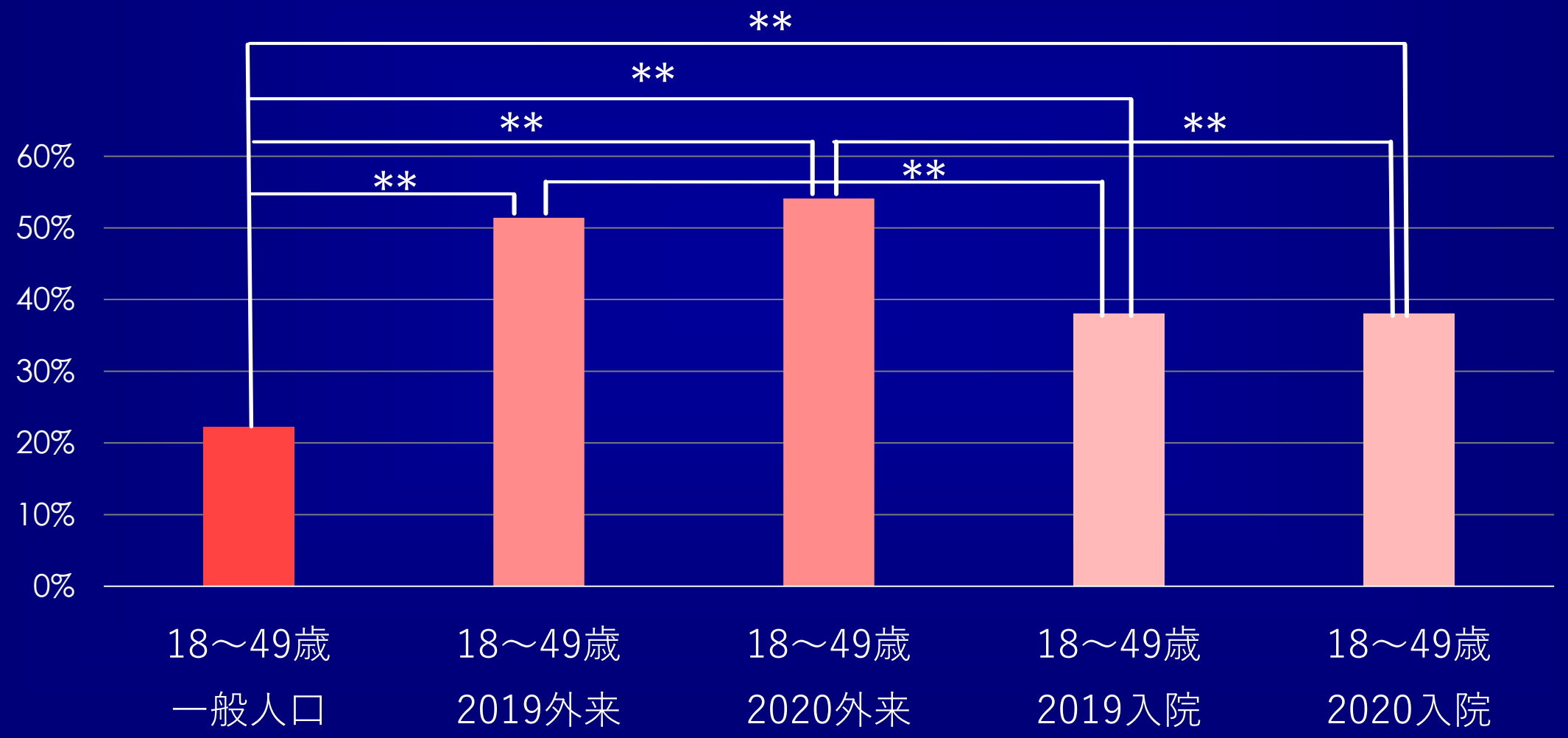
	総数	範囲未満（痩せ）		範囲内		範囲以上（肥満）	
	人数	人数	%	人数	%	人数	%
総数	4,336	848	19.6	2,324	53.6	1,164	26.8
18-49歳	1,374	138	10.0	931	67.8	305	22.2
50-69歳	1,610	266	16.5	855	53.1	489	30.4
70歳以上	1,352	444	32.8	538	39.8	370	27.4

令和元年国民健康・栄養調査　第17表の２　目標とするBMIの範囲の分布より抜粋

18歳以上でBMIデータのある調査対象者

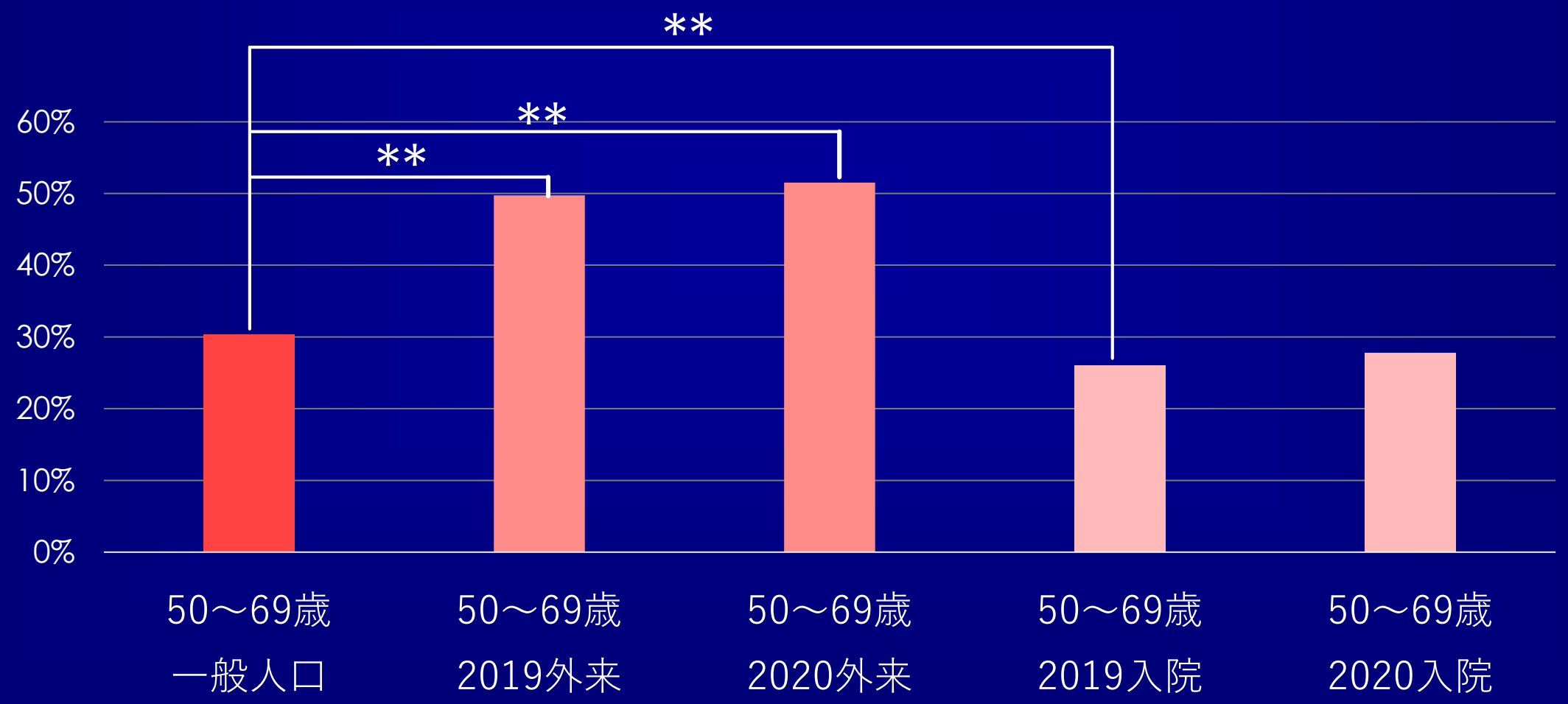
	対象者数	平均年齢 (min-max)
2019外来	2455	50（18-93）
2020外来	2847	50.2（18-98）
2019入院	7965	59.3（18-97）
2020入院	6812	59.2（18-98）

一般人口と外来患者、入院患者の肥満割合の比較（18～49歳）



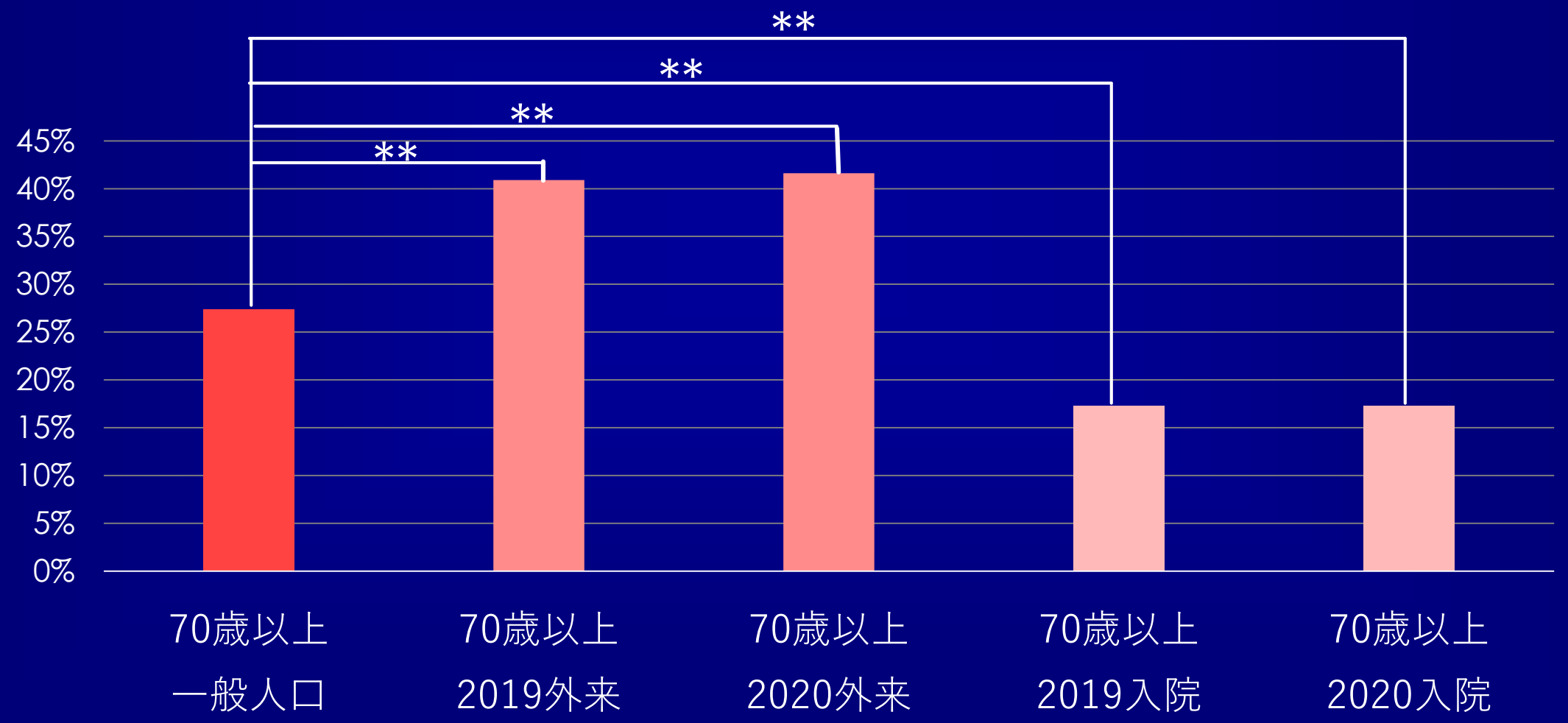
**P<0.05

一般人口と外来患者、入院患者の肥満割合の比較（50～69歳）



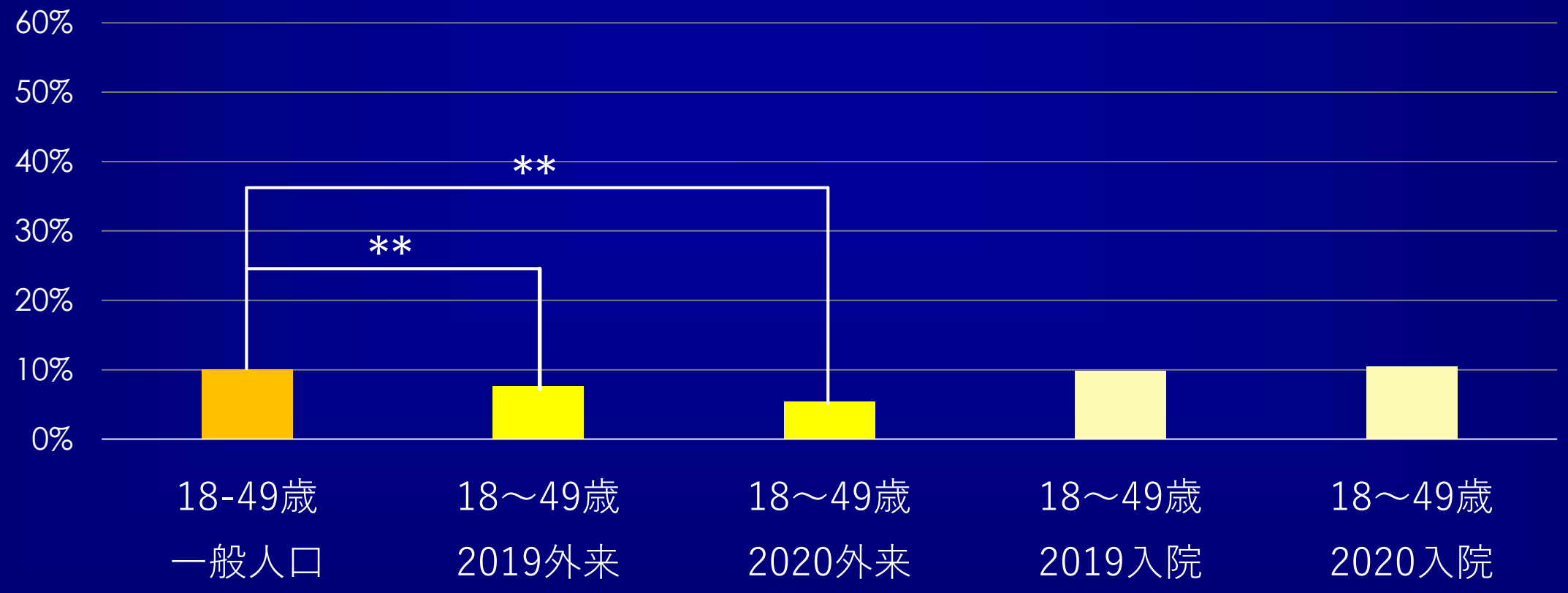
**P<0.05

一般人口と外来患者、入院患者の肥満割合の比較（70歳以上）



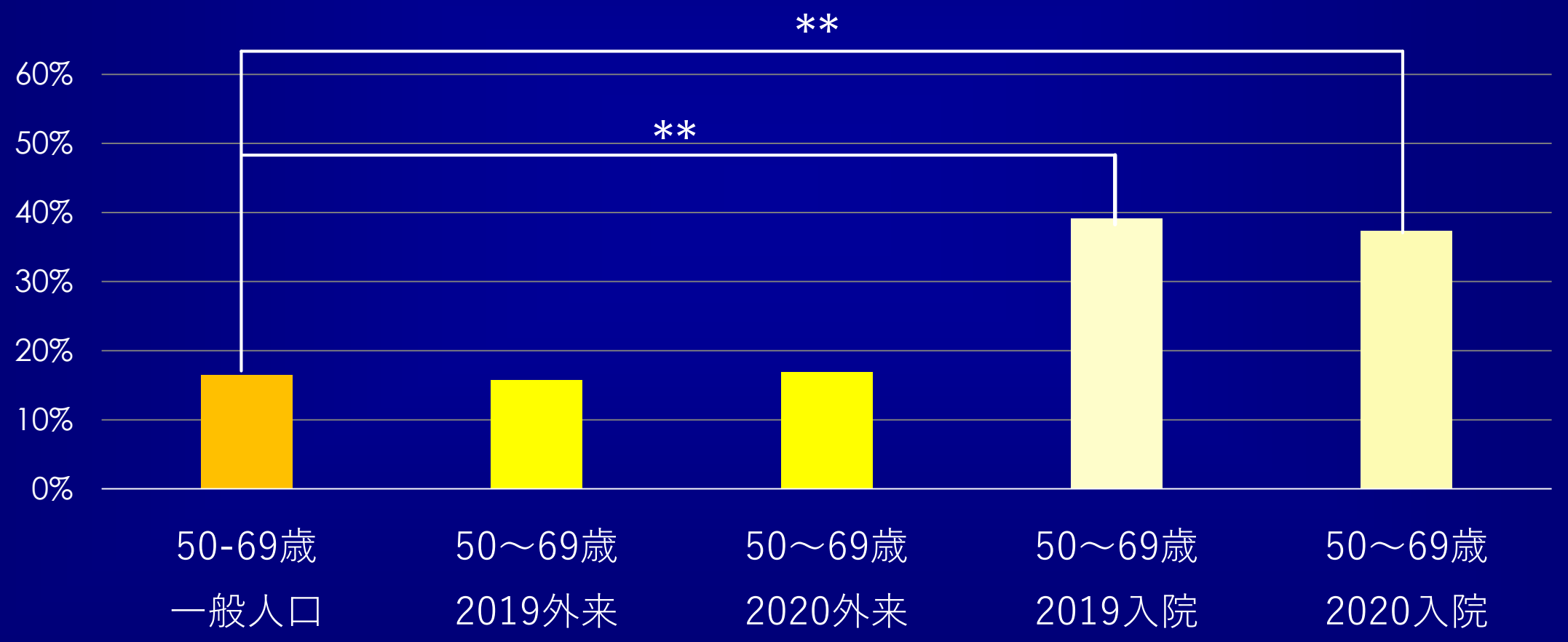
**P<0.05

一般人口と外来患者、入院患者の痩せ割合の比較（18～49歳）



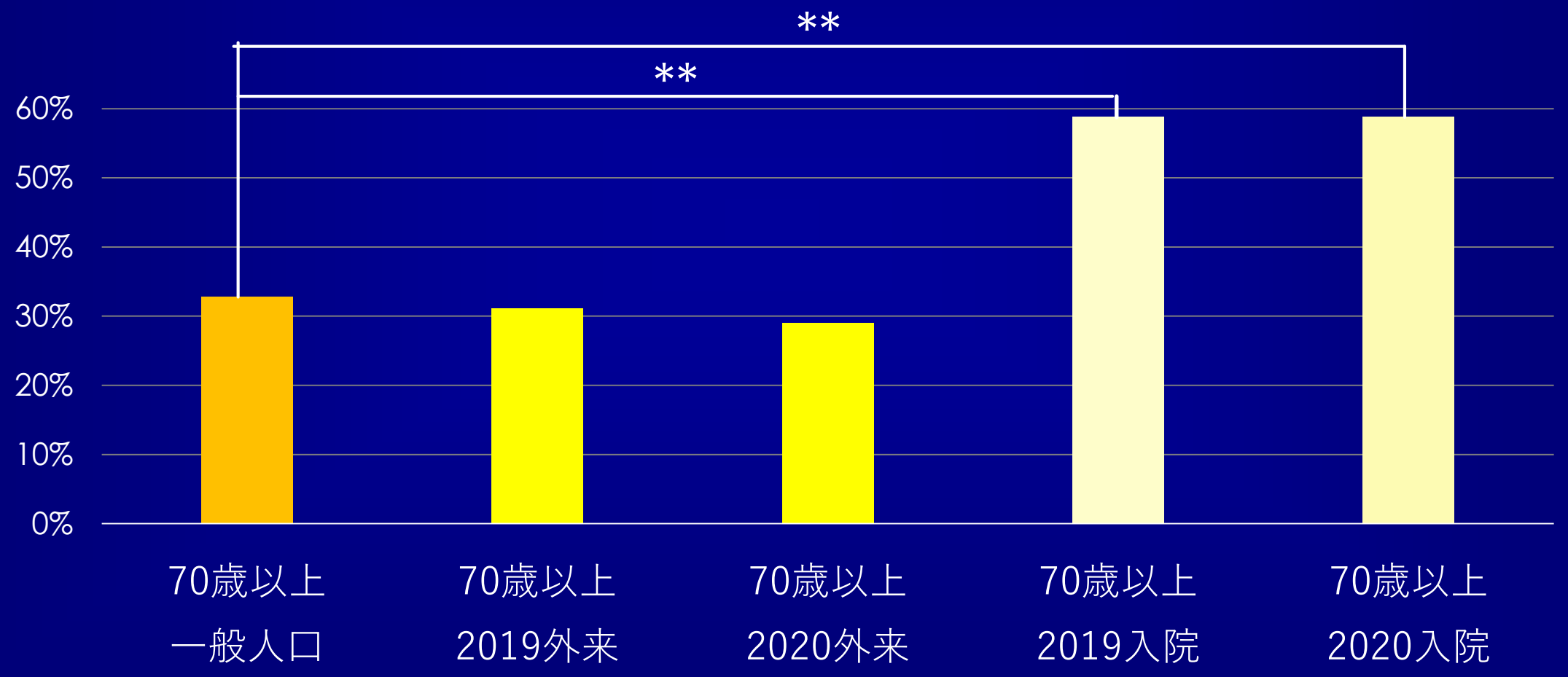
**P<0.05

一般人口と外来患者、入院患者の痩せ割合の比較（50～69歳）

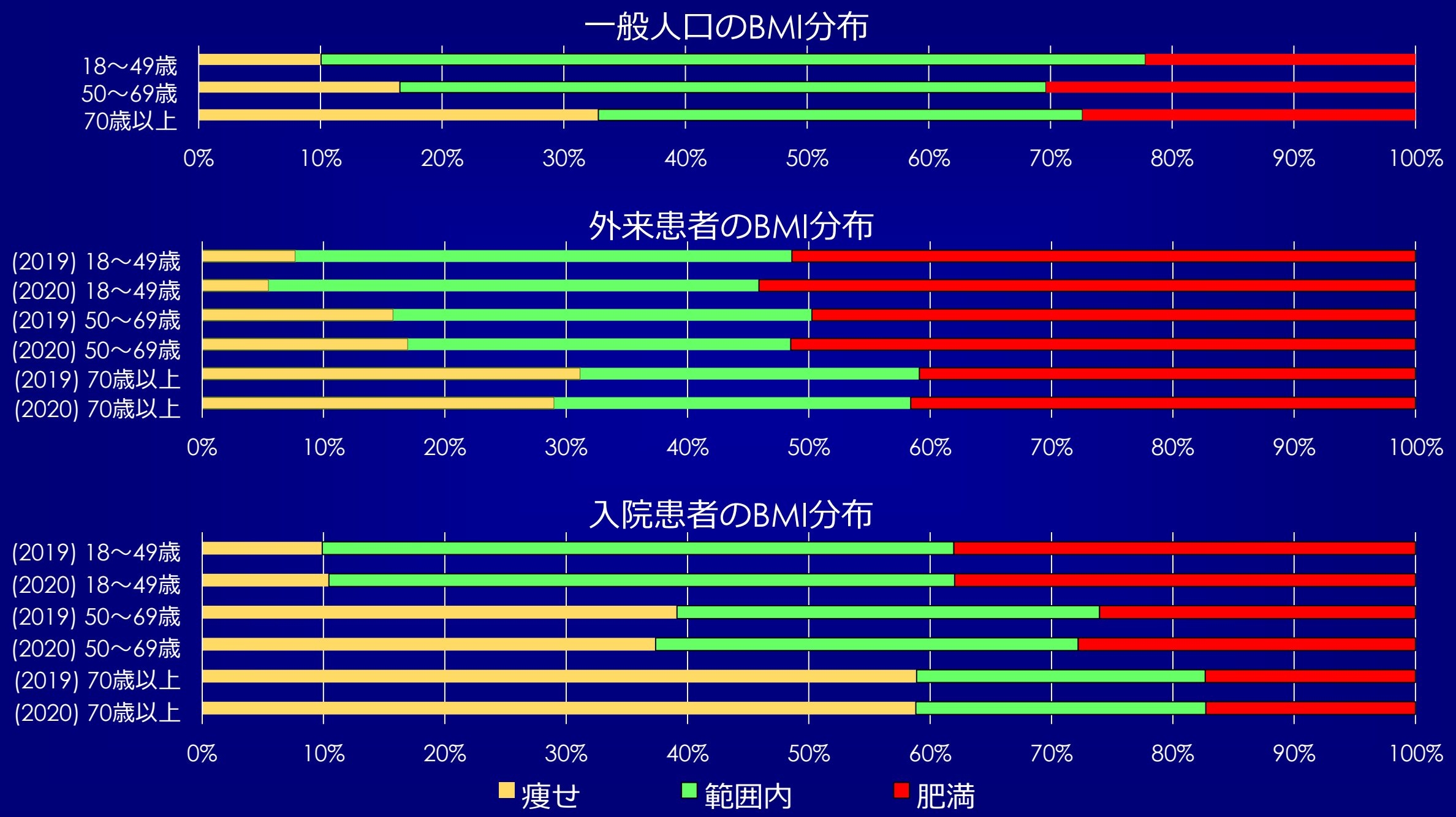


**P<0.05

一般人口と外来患者、入院患者の痩せ割合の比較（70歳以上）



**P<0.05


一般人口のBMI分布
18～49歳
50～69歳
70歳以上
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
外来患者のBMI分布
(2019) 18～49歳
(2020) 18～49歳
(2019) 50～69歳
(2020) 50～69歳
(2019) 70歳以上
(2020) 70歳以上
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
入院患者のBMI分布
(2019) 18～49歳
(2020) 18～49歳
(2019) 50～69歳
(2020) 50～69歳
(2019) 70歳以上
(2020) 70歳以上
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
痩せ
範囲内
肥満

体重増加を生じやすい薬剤の処方状況

処方患者の平均処方量ｍｇ（処方率）

	オランザピン	クエチアピン	クロザピン
2019外来	12.92 (20.5%)	257.44 (10.2%)	284.14 (5.3%)
2020外来	13.08 (20.4%)	251.77 (9.9%)	289.09 (6.5%)
2019入院	14.65 (29.5%)	306.61 (15.1%)	326.98 (3.7%)
2020入院	14.74 (29.3%)	291.67 (14.6%)	334.08 (5.1%)

オランザピン、クエチアピン、クロザピン使用患者のBMIについて

	各対象群の平均BMI	オランザピン使用者の平均BMI	クエチアピン使用者の平均BMI	クロザピン使用者の平均BMI
2019外来	25.13	24.41	24.74	24.84
2020外来	25.22	24.25	24.99	24.71
2019入院	22.20	21.92	21.95	22.35
2020入院	22.30	22.16	22.16	22.42

まとめ

- 外来患者は、肥満の割合が高かった。
- 入院患者は、若い年齢層では一般人口より肥満の割合が高いが、50歳以上では痩せの割合が大きく増加し、半数近くに痩せがみられた。
- 体重増加を生じやすいオランザピン、クエチアピン、クロザピンの処方状況は、クロザピンの処方率が外来で高かった以外は、外来患者よりも入院患者のほうが処方量・処方率ともに高かった。また、これらの薬剤が処方されている患者のBMIは、各対象者群の平均BMIとほぼ変わらなかった。

考察

- 外来患者は肥満を生じる割合が高く、食生活の乱れに対する栄養指導等が必要と考えられる。

- 体重増加を生じやすい抗精神病薬が処方されている患者でも肥満の割合は高くないことから、これらの薬剤は、患者を選んで処方されている。一方、これらの薬剤を処方するだけでは、痩せの対策としては十分ではない。

考察

- 入院患者は、加齢と共に痩せの割合が増加し、50歳以上では半数近くが痩せの状態となっている。人の総死亡率には複合的な要因が関与しているため、BMIだけを厳格に管理する意義は強くないが、入院患者は身体活動が乏しい状況があり、痩せへの対策も短期間では難しいことから、BMIを指標にこれまで以上に痩せの問題に着目し、生活の見直しを含む長期的な対策の検討が必要である。